

BBLセミナー コメント資料

2014年7月10日

「2014年版通商白書へのコメント」

伊藤公二

<http://www.rieti.go.jp/jp/index.html>

2014年版通商白書への コメント

2014年7月10日

経済産業研究所 伊藤公二

今年の白書の興味深いポイント

1. 円安下で輸出が伸び悩む減少を分析
(第Ⅰ部第2章)
2. 主要国経済のファンダメンタルズ・成長戦略を
比較(第Ⅱ部)
3. 対内直接投資促進の重要性を指摘
(第Ⅲ部第3章)

コメント：輸出の伸び悩みについて

①パススルー仮説

- 白書では、アンケート調査において輸出価格を改定しない企業の割合が多いこと等から、輸出数量の増加が弱めであるとしている。
- しかし、為替レートのパススルーが低いという現象は、これまでも国内外で幅広く観察されている点は留意が必要。
- ただし、従来以上にパススルーが低下している可能性はありえる。この点は、直接パススルー率を計測することで検証可能。
- ✓ また、貿易に占める企業内貿易（企業間貿易以上に為替レートの変動を反映しにくい）のシェアもパススルー低下の傍証となる。
- ✓ 東アジアにおける我が国企業の活動の拡大は、現地法人への中間財輸出の拡大を伴う（第Ⅱ部第3章）が、その少なくない部分は企業内貿易である。

コメント(1):輸出の伸び悩みについて

②海外生産による代替仮説

- 白書では、アンケートにより、昨今の円安局面でも海外の生産設備を縮小しない企業が大半であることから、海外生産の国内への回帰は生じていないことを示唆。
- 海外生産比率の推移(第Ⅱ-3-2-32図)を見ても、海外の売上高のシェアは上昇傾向にあり、中長期的に日本からの輸出が海外現地生産に置換され、輸出の伸び悩みを招いている可能性は否定できない。

コメント(1):輸出の伸び悩みについて

③輸出競争力低下仮説

- 白書では、日本、ドイツ、韓国、中国の主要輸出品について、2000年、2005年、2010年、2013年の貿易特化係数・輸出額伸び率・輸出額の推移を比較。
- 我が国の電気機器、一般機械、精密機器については、輸出額伸び率の低下、貿易特化係数の低下が顕著であり、相対的な輸出競争力が低下していることを明確に指摘。

コメント(1):輸出の伸び悩みについて

④まとめ

- 以上により、3つの仮説は、いずれも輸出の伸び悩みを説明する理由と思われる。この中で、政策的対応が必要なのは「輸出競争力の低下」。
- この他、輸出数量は為替レートの急激な変動に対して徐々に変化するのも事実(「カーブ効果」)。2005年以降の円安局面の例も考慮すると、今後1年程度の間には輸出数量が増加する可能性もある。引き続き注視する必要あり。

コメント(2): 対内直接投資の促進について

- 日本のグローバル化で最も遅れている分野の一つ。
- 外資系企業は、平均的に生産性が高く、対内直接投資の拡大は生産性向上の観点から望ましい。
- また、技術・知識集約的な企業であることも多く、国内企業への技術のスピルオーバーも期待される。

Haskel, Pereira and Slaughter (2007) REStat: 1973-92年の英国では、外資系企業のシェアが10パーセントポイント上昇すると、当該産業の国内企業のTFPは0.5%上昇。

- 対内直接投資残高は2008年の18.5兆円をピークに伸び悩んでいる。「日本再興戦略」における目標(2020年に35兆円)実現に向け、対内直接投資を促進・阻害する要因の解明を期待。

質問

1. 第Ⅱ部第1章の冒頭で、欧州における労働市場改革を紹介しているが、これは我が国でもこうした改革が必要という隠されたメッセージか？
2. 中国経済の構造上の課題（投資への過度の依存、過剰設備問題など）は、5, 6年前と比較してあまり変わっていない。こうした課題は今後改善する見込みはあるのか？